

18 世紀半ばペルー・リマ地域の大震災と先住民による同時多発的抵抗の発生： レパルティミエントを基礎として

真鍋周三（兵庫県立大学）

キーワード： レパルティミエント、リマ商人、大震災、疫病、先住民の同時多発的抵抗

Gran terremoto de Lima-Perú y la aparición de la resistencia simultánea indígena a mediados del siglo XVIII: En el quid del problema de repartimientos mercancías

SHUZO MANABE (University of Hyogo)

Keywords: repartimientos mercancías, mercaderes de Lima, gran terremoto, epidemia, resistencia simultánea indígena

1. はじめに

17 世紀末期にレパルティミエントが始まる。1754 年になってそれは法制化される。レパルティミエントとは、コレヒドール（地方[プロビンシア]行政官）による先住民への商品の強制的分配とその代価の強制徴収である。18 世紀に深化・本格化し、先住民にとっては債務がさらに増えることになった。

18 世紀は「反乱の世紀」とよばれる。1742 年にフアン・サントス・アタワルパの反乱が中央セルバを拠点に発生する。以後、長期にわたって続く（1755 年頃まで）。リマの当局にとってそれは大きな脅威であった。

スペインは国庫拡張主義政策を継続し、植民地からの増収を求めた。1746 年から 1750 年にかけてペルー副王領の首都リマ市で大震災が発生し疫病が流行する。先住民による同時多発的抵抗が発生する。

2. レパルティミエント：リマ市とその近隣地方

レパルティミエントのためにペルー副王領内諸地方のコレヒドールに商品を提供したのはリマ商人であった。これには 2 つのポイントがある。第一に、コレヒドールはリマ商人から割り当て用商品を掛け売りしてもらって入手したことである。第二に、1678 年以降「コレヒドール」の官職は「売官制」となっており、その官職購入費をリマ商人に融通してもらって官職を購入し

たことである。コレヒドールはリマ商人の支配下に置かれた。内容面では、ラバの占める割合が大きい。17 世紀後半からラバが物資輸送面の主役となる。首都を起点とする商業網が構築された。リマ商人はリマ・コンスラード（商人ギルド）を後ろ盾に、王権とも結合し政財界に進出した。

レパルティミエントは副王領の商品需要を支え保証した。リマ商人が「卸し」を担い、地方官僚のコレヒドールが「小売り」を担った。リマ市近隣諸地方ではレパルティミエントは大規模であった。

ワロチリ地方の場合を見てみよう。この地方は早くから首都に生活必需品を供給していた。海岸部と内陸山岳部とを結ぶ交通の要衝でもあった。先住民が出稼ぎ移民として首都に流入し「セルカド」に住居を確保して、鍋職人・小商人として働いた。ワロチリ地方では先住民人口が多く集中しており、リマ市とその周辺部地方（合計 9 地方）においてその人口規模（1754 年）がハウハ、タルマに続いて 3 番目に大きかった。大半が共同体成員であり、貢納やミタ（強制労働）の負担も当然大きかった。レパルティミエントの規模は 5 か年間で「14 万ペソ」（1754 年）であり、これもタルマ、ハウハに続いて 3 番目に大きかった。

3. 1746 年リマの大震災

市壁で囲まれたリマ市は東西の最大幅が 3.7km、南北が 2.2km であった。サンティアゴ教

区、サンタ・アナ教区、サン・ラサロ教区など5教区からなつた。1746年10月28日22時30分、ナスカ沖の海底を震源地として震度8.4の大地震が発生。半時間後に大津波が到来。リマとその外港カヤオに大被害をもたらした。最大津波は20mを超え、カヤオは水没した。リマ市では市壁の内側にあった一般家屋3,000軒の大半が倒壊した。副王宮も被害を受ける。リマ市の死者数は約1,300人。カヤオでは住民5,000人弱が死亡し、要塞は消失した。リマでは衛生状態が悪化し腸チフスや天然痘などの疫病が蔓延した。市の東部では粗末な集合住宅や小屋がひしめきあい、先住民移民・職人が多く暮らしていた。鍋屋が多数存在し、鍋職人が大勢いた。しかし震災後、首都では物資の調達に滞り、人々は困苦にあえいだ。厭世観が広がる。リマを離れる先住民も続出。混沌が支配するリマ市では人々の集団的恐怖が社会運動へと繋がっていく。

4. 1750年先住民による同時多発的抵抗

(1) リマ市における反乱計画の出現

1750年6月、リマック川の北側にある郊外地区サン・ラサロ教区から反乱計画の存在が副王に伝達された。副王は、アウディエンシアのオイドール(聴訴官)を検察官に任じ、「首謀者」の割り出しと逮捕に乗り出す。6月26日、コチャルカス地区サンタ・アナ教区の鍋屋の工房で指導者が逮捕された。

7月22日、関係者6名(ミゲル・スリチャク、サンティアゴ・ワルパ・マイタ、メルチョール・デ・ロス・レイエス、アントニオ・カボ、グレゴリオ・ロレド、フリアン・アヤラ)がリマ市中央広場で絞首刑に処せられ、その後八つ裂きにされた。身体の一部は、処罰として市壁に晒された。関係者の大半が先住民であった。

インカ貴族の末裔フランシスコ・インカは副司令官であった。サンタ・アナ教区で陶工ギルドの長を務めていた。6月、反乱計画の途中でリマ市からワロチリのラワイタンボに帰還する。

反乱計画の概要は以下の通り。真夜中に反乱軍は副王宮を襲撃し、副王庁の王権閣僚全員を捕える。その後カヤオに進み、監獄を襲撃しそこ

に置かれている武器を奪う。先住民職人(レンガ積み職人、大工、鍛冶屋)やペオン(日雇い労働者)との合流を目指す。

(2) ワロチリの反乱

ワロチリではフランシスコ・インカに共鳴する先住民が内外から結集していた。例えば、カンタ、ヤウヨス、ハウハ、タルマ、ボンボン(=パスコ)地方からワロチリに到着していた先住民だけでも400人を超えたようだ。1750年7月26日、ワロチリで反乱が始まった。コレヒドールを襲撃し捕え処刑する。

反乱統率者としてはフランシスコ・インカの他に、リマの反乱計画立案者のひとりであるペドロ・サントスがいた。ワロチリ反乱はリマにおける先住民の抵抗と同時多発的に発生した。副王マンソ・デ・ベラスコはワロチリ内外の当局者に対応を委ねた。9月頃までに反乱は鎮圧された。

5. おわりに

リマ市において先住民はレパルティエメントの本質であるリマ商人の役割やその根幹を察知していた可能性が高い。先住民は大震災と疫病に遭遇し荒廃した首都の姿を目の当たりにした。その衝撃がスペイン人支配者に対する反乱計画の策定、反乱に繋がったように思われる。

先住民は、リマ市(カヤオを含む)やその近郊ワロチリにおけるスペイン人・白人支配者の排除を目指すことで、不当な搾取・収奪、抑圧から解放されるものと考えた。1750年の先住民の同時多発的抵抗は18世紀ペルー副王領における大反乱の先駆けであったといえよう。

【主要参考文献】

- O'Phelan Godoy, Scarlett, 2002, *Una rebelión abortada. Lima 1750: la conspiración de los indios olleros de Huarochirí. en Sobre el Perú, Homenaje a José Agustín de la Puente Candamo*, Tomo II, pp.935-967, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.
- Walker, Charles F., 2008, *Shaky Colonialism: The 1746 Earthquake-Tsunami in Lima, Peru and Its Long Aftermath*. Duke University Press, London.